うかといふ朝

いつも日曜の日課として圓政寺町の先生の許へ日本畫をならひにゆく、丁度此の日も前から暇々にかいて置いた畫を卷いて長い廊下の舍を出る、と理科教室の棟から畫でさへ杜鵑なく鴻の峯の翠こぼれんばかりに欝蒼とまろく高く聳えて、新聞社の屋根越しに見ゆる春日山の一本松を中心に左右に延びたこの峯裾の綠、春もやゝたけて流水花なきの今日この頃、れむらせて養ひたてよと誰かもいひし春の雨、未だまたく霽れず鼠雲紫雲烟くづれては濤うつ如く、白蓮華みだれては牡丹に似、峯をはなれ空ゆくあれば、谷を下り麓めぐるも澤にしていつしか思ひは遠く詩神畫妃の殿堂にはせ、いかになさば此の偉なる趣、感ずべきか、何學ばゞ永久に此の大景世に傳ふべきか、我や今中學の三年生たりとも學びなばいかで畫かれざる事やあらんと、飽かずもなほ寒き敷石に立ちて眺むるに、羊群れゆくと見れば獅子いかれるさまをなし、虎はしる如く見ゆればはや眠れる象に形どられ、千變萬化限りなき春の雲誰かよく如斯きの奇景を畫きし日本畫家やある、富士の繪によく雲を見れどそは高きを現はさんと棚引雲のみなりし、されば朝夕に見るリーダーの挿繪こそまことに一片の雲をもゆるかせにせず畫かれたり、然り洋畫なるかな洋畫なるかな。

『オイ何うだ君は』！不意を打たれて顧れば同級のF氏、手にせし日本畫はいつしか握りしめられてF氏の言葉きけども聞えず。

かくて後、洋畫のうちにも寫生上最も輕便にして最も活潑にして清楚なる水彩畫にしくものなし、と學びそめてより日甚だ深からざれども、當年の意氣またゆめのごとく消えて、身は島守の海にのみ日ごとの彩をながめつゝ、

まゝならぬ筆に多きは日毎の涙なりけり。

□自然の色うつりよき　草水生

この夏、ある天氣のよい日の九時頃でした、私は隣村に用達に行く途中、右手にはもう穗の出さうな麥畑が續きて、その彼方には青い木立の山が強い日影を斜に上から浴びてゐました、平常には別に氣にとめたこともなかつたのに、當日は妙に鮮明して、私の目を引き附ける何者かゞあるやうに感じたので、それからと云ふものは、何事にならず氣をつけてゐました、ところが、觀れば觀るほど、自然の色のうつりのよさ、毎度、心がサツパリと拭ひ去られるのです、その後、友人から、水畫のケスッチなるものを示されたとき、私は自然に對した時と同しやうな興味を感じました、それが、そもく私の水畫に志した因緣です。

□小村の朝　北多摩　山本野琴

眞紅の微光は、今しも曉東の空より、コバルトの如き淡靄の繁りに射初めて、山雀の夢も覺めけん、小さき羽ばたきの音には、無限の歡樂もこもらずや。

小田をめぐる野川に枯蘆の影ゆれて、行々子のこひ歌となりて、新しき水の咽きと和せり。山羊の乳うる兒の影、霜白き道とほく、たどり行くさまも可憐也。

あ……かくしても明け行く小村の畫趣多き朝也。』

＊　＊　＊　＊　＊